



TITLE:

# 学生参加を駆動力とするFDの組織化(<第12回大学教育研究フォーラム シンポジウム>話題提供3)

AUTHOR(S):

林, 哲介

---

CITATION:

林, 哲介. 学生参加を駆動力とするFDの組織化(<第12回大学教育研究フォーラム シンポジウム>話題提供3). 京都大学高等教育研究 2006, 12: 205-209

ISSUE DATE:

2006-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54186>

RIGHT:

## 話題提供 3 「学生参加を駆動力とする FD の組織化」

林 哲 介（京都大学副学長／京都大学高等教育研究開発推進センター長）

（林） 私が頂きましたテーマは「学生参加を駆動力とする FD の組織化」ですが、お話しできることは、ただいまの二つの話と比べますと、FD 組織化には距離のあるまだごく出発点といえますか、種のような実情をご紹介しますことになるかと思います（スライド 1、2）。

はじめに 2 年前に京都大学で始めました教育交流会プロジェクト、正確には学生教職員教育交流会プロジェクトをご紹介します、そして、なぜ今、学生参画なのかということについて、若干私見も含めてお話をさせていただこうと思います。

お手元に茶色の「京都大学教育交流会プロジェクトの成果報告書」があると思います。これはつい 1～2 日前にできたのですが、先ほどから司会をさせていただいている溝上先生を中心にしてこのプロジェクトを始めて 2 年目になりますが、これまでの概略をまとめたものです。後で見ていただいたらいいのですが、このことについてまずご紹介をします。

一昨年に我々のセンターで数名の先生がたにご相談をして、センターとしてこれからどんなことをしていくのか、FD にどういうふうに結びついていくかを遠い視野に入れながら、従来は大学の教育のことを議論するというとほとんど 100% 教員の中で議論するしかなかったのですが、本当にそれでいいのだろうか、学生と一緒に教育の問題を議論すると新しい方向を見つけ出せるのではないかなというように考えて、少しそんなことをトライアルで始めてみようとして議論をしました。

ここに（スライド 3）「大学の教育というものは、教員から一方通行の知識・技術の伝授・伝達ではなく、学術の営みの本質をめぐって教員と学生が相互に真剣勝負で向き合うことを通して、個々人の知を培っていく、そのような働きである。このような働きの土壌を、教員・学生の協働によって育むことが求められている」と書いてあります。これは、この教育交流会プロジェクトというものを説明するために作りましたホームページのいちばん最初に書いたもので、趣旨はほとんどこれで尽きると言えるかもしれません。

具体的にどんなふうにしていったかといえますと、ここではいちいち示しませんけれども、少しレジュメにも書きましたように、センターを中心にしてそれぞれの先生がたの授業やゼミ、研究室にいる学生諸君を誘っていただいて、京都大学の教育を学生諸君はどう思っているか、そして先生がたにどんなことが言いたいかなどを議論する機会を作ろうということから始めました。

はじめは十数名ぐらいの学生諸君が集まり、それから徐々に増えていって、最も多いときには約 30 名ぐらいの学生、しかも 1 年生から大学院生まで含めたいろいろな学年の、またいろいろな分野の学生諸君が参加する、そして、教員はセンターの教員を中心にして十数名が参画するという形で取り組みました。

形としては、センターと、全学共通教育に責任を持っている「機構」とが関り、大学としてのフォーマルな活動と位置づけることにいたしました。したがって、必要な予算措置もセンターを中心にして行うことにして進めていったわけです。

具体的にどんなことをしたかという、全学に呼びかけて交流会の全体会を毎年一回ずつ開こうということで、ここでは例えば自分たちの受けている教育をどう思っているか、あるいは先生がたに言いたいことは何か、先生が考えていることと学生の考えていることにずれはないかといったことを幾つかの分科会に分けて議論しようと呼びかけました。そういう呼びかけの中で、新たに学生諸君が参加してくれるようなことが少しずつ進み始めたということです。

その結果として、その後幾つかのワーキンググループを作って、学生諸君と教員がグループをつくり、継続的な作業を始めることが生まれてきました。例えば何人かの先生にインタビュー活動をする、あるいは学生諸君の意見を聞

くといったことを通して、先生が大学の教育、特に教養教育についてどんなふうを考えておられるかということを引き出し、それを広報誌に載せていくというような活動もありました。それから、他大学との交流を始めようということも最初から取り組みました。これは、京都大学の学生が受けている教育と、他大学で学生諸君が受けている教育は一体どう違うのだろう、学生諸君はそれをどう思っているのだろうかというようなことをぜひ議論したいということから始まり、具体的には大阪大学の教育センターの先生と連絡が取れて、先生も含めて大阪大学との交流が現在まで続けられてきています。さらに、学内の後援会から予算支援を受けることができて、来年度（今年の秋）には新たに香港科技大学との交流も計画ができるというところまで進んできました。また「自主研究ゼミ」という全学共通科目を新たに創設するということを学生諸君と一緒に相談してやっています。先ほど井村先生が「ポケットゼミ」のことをご紹介されましたが、この交流会がいろいろ議論し案を立てて、ポケットゼミの科目の一つとして「自主研究ゼミ」というのを立てる。これは1回生の学生諸君が自分でどんなことを研究してみたいかを持ち寄って、研究のしかたを議論し、アドバイスしてくれる先生を探し、相談をして、最終的には半年の期間にその研究成果を発表する。そして、それを互いに評価し、優れたものは表彰するということまでやるという、意欲的な取り組みです。

この例もパンフレットの中にあります。1回生にしては驚くような優れた研究成果をまとめたものが生まれ、この4月からはポケットゼミを離れて、より一般のゼミナール科目として発展することになっていますが、そんなことも取り組めるようになってきました。

ざっとこのようにして進めてきたのがこの交流会プロジェクトです。もちろん、これはまだごく限られた人数で、こういうのに積極的に参加してきている学生諸君も、年がたつにつれてどんどん入れ替わっていくということもあります。参加している諸君は京都大学の学生の中でも研究や勉強についていわば極めて積極的な学生であり、これがどういうふうに全学に影響を及ぼすような活動として広がっていくかということは、これからの大きな課題になっています。しかも、教員の側としてはフォーマルな組織的活動として取り組むけれども、学生諸君の側から見れば、サークル活動に近く、“半官半民”と私は呼んでいるのですが、半官半民型の取り組みです。あまり例のないものだと思うのですが、こういうものが最終的に大学における教育にどういう影響を与えていくことができるか、まさにこれからの課題として試行錯誤を繰り返しているのが現状です。

では、なぜ今こういうことを始めようということになったかについて、二つの点から私見も含めてお話をしておきたいと思います。二つの点の一つは、京都大学の場合はどうなのかということ、もう一点はもう少し一般的に今の日本の大学の教育の状況の中でどうなのかということです（スライド4）。

京都大学の場合でいいますと、先ほどの井村先生のお話と関連するのですが、一つは井村先生のご提案で始まりました全学教育シンポジウム、教員が毎年200人ぐらいい夏に一泊二日でホテルに泊まり込みまして、京都大学の教育を議論するというのが、平成8年から始まって10年になります。毎年ずっとそういうふうに続けられてきたもので、京都大学が目立った形でやっているFDはほとんどこれ一つだと言ってもいいかもしれません。

もう少しミクロで見ますと、これも井村先生がご紹介されましたが、医学研究科では、年末に一泊二日で行われているのがやはり現在までずっと続けられていまして、医学部教育についてのFD活動があります。それから、センターの田中先生などを中心に、協力しながら工学研究科でも徐々にFDが進められていますが、この医、工の二つはいずれも、人材養成という意味での目的・目標の比較的分かりやすい部局なのです。私に言わせれば、これは「実学」の世界です。実学の場合、割とそういうことがやりやすくなっている。ところが、それ以外をまとめて「虚学」というとしかられるかもしれませんが、虚学の世界ではFDは残念ながら京都大学の中には全く根づいておりません。全学シンポジウムだけは全分野の先生を対象にして教育の議論をする唯一の機会ということで、これまで続けてきています。

しかし、残念ながらこれには限界があります。もともと第1回から5～6回ぐらいいまではFDにはほど遠い、京都大学の混乱している全学共通教育をどうするのかということで、実施側と受益者側の教員が正面衝突をするというようなことを繰り返してきたシンポジウムだったわけです。ここ最近になって、京都大学の教育をどうしていくべきなのか、特に評価との関係で京都大学の教育を立て直していくことの必要性に基づいた議論ができるようになってきたところです。ただ、その場では議論するけれども、実際にはその議論がどのように各学部にフィードバックされてい

るかはなかなかはっきりしません。全学共通教育についてはある程度フィードバックされ、年々少しずつ改善が進んでいるのですが、京都大学の教育を隔々まで先生がたが意思統一をして進めていこうというところにどれだけ寄与しているかというと、やはり先生がたのみの議論では限界があるのが現状です。

それから、ここに「自学自習」と書きました。これも井村先生のお話と関連します。先ほどのお話の中で、井村先生は百貨店の食堂のようにメニューはいっぱいあるけれども、お薦めメニューが京都大学の教育にはなかったとおっしゃいました。「コアカリキュラム」という議論があったけれども、結局それは無視されたというか、そっぽを向かれたとおっしゃいました。コアカリキュラムにそっぽを向いた張本人は、実は私かもしれないと思っているのですが、ただ、その後のいろいろな議論によって、京都大学の教養教育、外国語教育や基礎教育は別として、いわゆる狭い意味での典型的な教養教育については、多様な科目がメニューとして提供されていて、それを学生諸君が自由に選択するという伝統的なスタイルを基本にしています。教養教育の本来の意味からすると、多様な科目の中から何を学ぼうかと自分で選択し、判断することから教養教育は始まるという考え方がかなり大勢を占めていまして、私もそういう主張をこれまでしてきました。そういう考え方がずっと今も続いておりますし、むしろ最近の議論ではその重要性をさらに強調しているのが京都大学の場合の教養教育の流れです。

ただ、ここで重要なことは、そういうふうになっていることが果たして学生諸君に正しく受け止められ、その効果がちゃんと上がっているかということで、これについては大変問題がある。随分改善されてきましたけれども、しばらく前までだったら、学生諸君にはその真意がなかなか受け止められず、手ごろに単位の取れる科目をつまみ食いするということが多くなってしまっていました。それでは本来の教育の目的は達成されていません。そこから、この京都大学のような教育方針を有効にするためには、学生諸君と教員が協働してその教育の意義を理解し、実際に成果として上げていくためには、学生諸君はどういう努力をし、教員はどういう努力をしなければならないのかを明らかにしていくようなアクティビティを大学の中で作っていく。そして、そのアクティビティが学生諸君、教員のすべてに大きな影響力を与えていくような、そういう成果を生み出さなければならないと考えたのです。そのことが、学生参画という言葉で表わされる交流会プロジェクトを始めた意識の根底にありました。その点が京都大学の実情から出てきた一つの動機だと言えそうです（スライド5）。

もう一点は、一般に全国の大学の現在の状況の中でどういう問題を感じるかということについてであります。学生による授業評価のような教育改善の活動は何年も前からいろいろな大学で、恐らく7～8割の大学では完全実施されているわけですが、果たしてこの授業評価というものが、どれだけ大学教育をリアルに変化させ、あるいは時代の要請に応える形で動かしていけているかというと、なかなかそうはなっていない。限界がやはりあるだろうと。個々の授業を改善するという意味ではそれなりの役割を果たしているかもしれないけれども、大学教育全体をどう動かしていくかということ、なかなか難しいところがあるし、これまで議論されてきたFDもややパターン化しているところがある。先ほどの久留米大学や名城大学の例は大学の实情に沿った新しい展開をされていて、そういうふうに進みたいのですが、従来型のFDからなかなか抜け出せない。

そういった状況に加えて、さらに少子化全入時代を迎えるようになって、それぞれの大学がどんなふう動いているかということ、結局、いかにして学生諸君を社会に送り出すかということに四苦八苦する、有効に学生を送り出すことによって自分の大学は生き残らなければならないという、そこから、FDにおいても起こってくる流れは、学生にどう有効に知識や技能を身につけさせていくか、あるいはそのために先生はどういう授業方法を上手にしなければならないか、成績評価はどういうふうに厳密にしなければならないかといった、技術的発想がどんどん出てくる。学生個々人の「品質保証」をいかに効率よくするかということばかりが議論になっていて、これを一昨年以来、我々のセンターでは、「大学の学校化」が進んでいくと呼んだわけです。

そういう傾向がこれからの本当の大学のあり方なのだろうか、これは、入ってくる学生諸君の希望と合致しているのだろうかという疑問です。学生諸君が何を求め、そして、教員はそれをどう受け止め、進めていく必要があるのか。そのためにはやはり学生諸君とリアルな連帯・協働を作る必要があるということで、これが、学生参画ということで各大学が進められていることだと思えます。

今ここでご紹介している京都の例は非常に京都的であって、中でも極めて自覚の高い学生諸君を中心に始めたことなので、もちろんこのようなパターンをいろいろな大学に直ちに一般化できることではありません。多くの大学でそ



それぞれの実情に合わせて学生参画と呼べる工夫が進められているのですが、その一般的な背景は多分同じところにあるのではないかと思います。

最後に、「学びの協同体」と書きました。これは京都大学よりもずっと先進的な岡山大学流の学生参画の形で、この「学びの協同体」という言葉は、中心になっておられる橋本先生から教わった言葉です。何かの機会に橋本先生に直接聞いたのですが、岡山大学では大学のフォーマルな教育課程やカリキュラムを議論する委員会に学生諸君の代表が参加し、そこで学生諸君を含めて決定することが大学の決定になる、大学の本来の委員会運営の中に直接学生諸君を組み入れるという形で進められています。それで何を指しておられるのかとお尋ねしたときに、橋本先生の口から出てきたのが、この「学びの協同体」という言葉です。この漢字は合っているかどうか、違ってれば後で教えてほしいのですが、これは、確かに今申し上げたことの一つの的確な表現と言えるかもしれません。

ただ、私自身はもう一歩進みたいと思っていて、この点はぜひ後で議論できればと思っているのですが、この「学びの協同体」が目指すものは何なのかということに、もう一歩突っ込む必要があるのではないかと（スライド6）。学びの協同体ができたらそれでいいということではなく、学びの協同体は何のために必要なのか、なにを目指すのか。多分これは時代によって変わってくるだろうと思いますが、今の日本のおかれている大学教育の状態、先ほど井村先生から何が要請されているのかよく分かるお話をいただきましたが、その中で触れられなかった点があります。それは、大学全入時代といわれ、学生の状況がどんどん変化していつている、学力低下ということも言われるようになって、それぞれの大学で教育についての悩みが非常に増えているという実態があります。その問題を一体どうしていくのかという視点から、学びの協同体が目指すべき中身が出てくるのではないかと、そういうことをもう一歩詰めて議論を進める必要があるのではないかと考えています。

FDに何が必要なのかということは今申し上げたことにつながりますが、これ以上はこの場ではお話しせずに、後の議論のところで機会があればと思います。

私の話題提供はここまでとさせていただきます。どうもありがとうございます（拍手）。

（溝上） 林先生、どうもありがとうございました。では、引き続きまして、田中先生、よろしくお願いいたします。

**話題提供：**

**学生参加を駆動力とするFD組織化**

林 哲 介

京都大学高等教育研究開発推進センター

1

1. 「教育交流会」プロジェクトについて。

2. なぜ今、学生参画なのか。

・京都大学の場合

・一般に

3. FDに何が必要なのか。

2

1. 「教育交流会」プロジェクトについて。

「大学の教育というものは、教員から一方通行の知識・技術の伝授・伝達ではなく、学術の営みの本質をめぐって教員と学生が相互に真剣勝負で向き合うことを通して、個々人の知を培っていく、そのような働きである。このような働きの土壌を、教員・学生の協働によって育むことが求められている。」

3

2. なぜ今、学生参画なのか。

・京都大学の場合

「全学教育シンポジウム」の限界

“自学自習”

4

2. なぜ今、学生参画なのか。

・一般に

学生による授業評価、FDのパターン化

少子化全入時代と大学の「学校化」

“学びの協同体”

5

3. FDに何が必要なのか。

いま、大学教育に課せられているもの

学生の視点から求められるもの

6